第 2 章　大統領への手紙

トマトができない

エイミーたちは土曜日と日曜日の休みに、マロン村のある州都ビッグ・ロックシティにやって来ました。ベジタブル帽子やベジキャラのバイオ T シャツを売っています。1 日も早く大人たちに、この帽子をかぶってもらいます。クラウシアの研究するマインドエネルギー情報を多く得るためです。

ここでも頭がよくなるぞとか、心が落ち着くと噂が広がったスピリアンの帽子はすごい人気です。今度はバーバラのお母さんのスージー・オリオン先生が付き添いで来てくれました。この大都会でも帽子はたくさん売ることができました。クラウシアはきっと良いデーターを取ることができるでしょう。

かわってマロン村では、アンおばあさんが困った顔で居間の椅子に座っていました。エイミーは、日曜日のお昼すぎにビッグ・ロックシティから家に帰ってきました。

「ただいま、バア」

「あぁ、おかえり、エイミー」

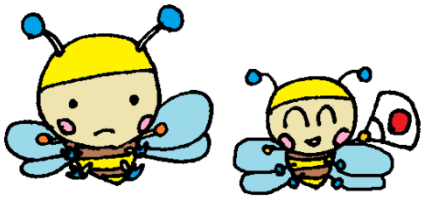
アンおばあさんは、うかない顔でいいました。

「どうしたの、バア？」

エイミーは、心配そうにたずねました。

「トマトの黄色い花が咲いても、実がうまくつかないんだよ」

「どうして？」



「みつばちが、急にいなくなっちまったのさ」

アンおばあさんは、本当に困ったようすです。

「みつばちが、いない・・・？」

「みつばちがいないと、実がならないんだよ。近所でも、マロン村でもそうだよ。おそらく他の村でもダメなんだろうな」

エイミーはしばらく考えていましたが、アイデアが浮かびました。

「隣のフォーティーン・マウンテン村に、アイムシュタインさんって有名な人がいるわ。そこに相談にいってこようかな？」

エイミーは、アンおばあさんにいいました。

「そうねぇ・・・でもその人は少し変人って言うし・・・」

アンおばあさんは、元気がありません。すっかりあきらめたのでしょうか。エイミーはレタに話しをしようと、自分の隣の客間をノックしましたが誰もいません。

「あれ、レタさん、いないのかな？」

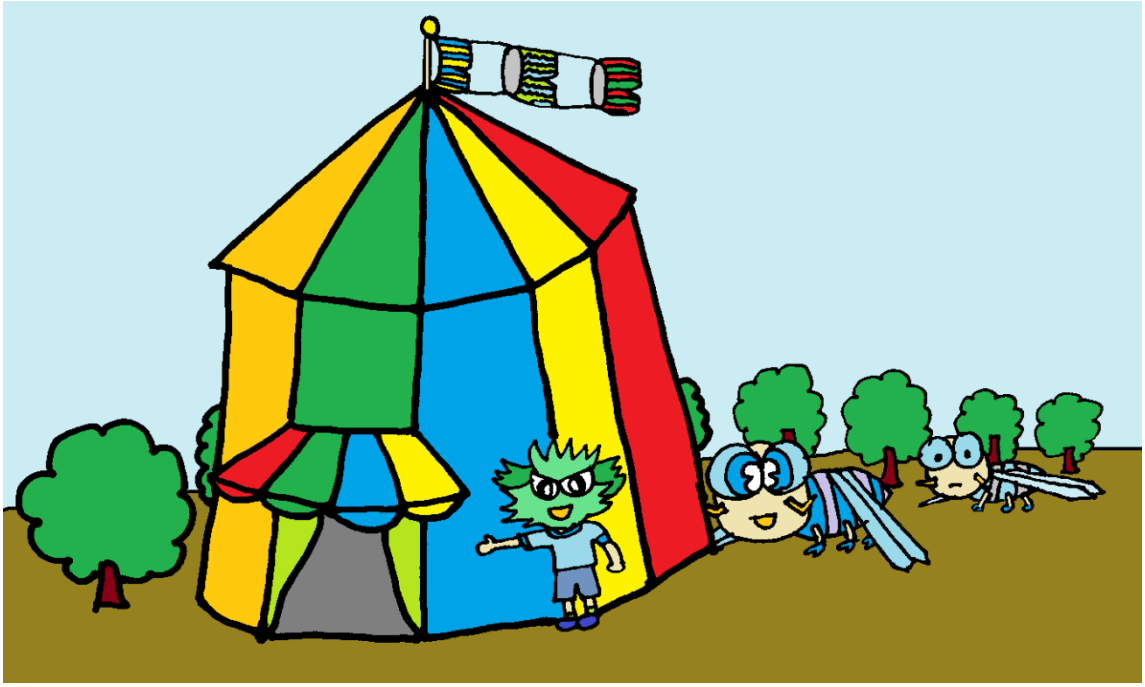
部屋に入り窓越しにむら庭を除くとテントがありました。エイミーは急いで裏庭に出ました。

「一体このテントはどうしたの？」

エイミーがそこにいたレタに聞きました。

『スカイブルー隊長が見つけてきて運んでくれたんだよ。だってオラッチの部屋ってあまりにも汚いじゃんかよ』

「・・・・」



『で、なんの用事だったニ、エイミー？』

「隣村のアイムシュタインさんっていう野菜作りの名人に会ってこようと思って」

レタがエイミーに向かっていいました。

『同じようなことがトナトン王国でもおきているニ。だからヒューマニーワールドに調査に来たんだけど、もう何かがこっちでも同時進行しているみたいだニ』

「おいらのおとうは、大工だから仕事はあるけど、食べ物がなくなるってことは大変だぞ。おなかがすくし」

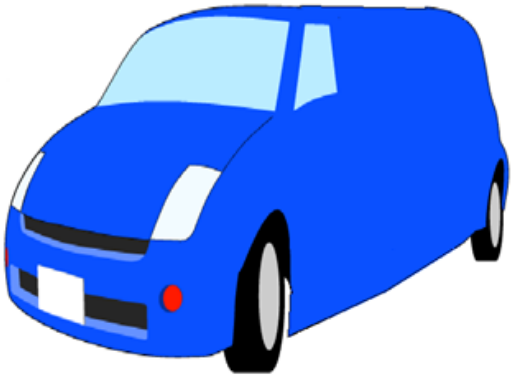
一緒にいたトミーも突然、心配そうにいいました。

「そう、あたしもトマトは大好きだし。エイミーはなぜかトマト嫌い・・・」

「・・・・」

「何の原因でみつばちがいなくなったのか？とにかく今から、訪ねてみよう。なにか新しい情報があるかもしれないしね」

バーバラのお母さんがワゴン車で3人を連れて行ってくれることになりました。こうして日曜日の昼下がりに、アイムシュタイン所長を、訪ねます。



「出発進行ぅ～～～」

トミーは、またワクワク・ドキドキ気分で、いつものように調子に乗って叫んでしまいました。

「トミー、遊びじゃないんだからね」

愛・アイムシュタイン研究所

エイミー、バーバラ、トミーの子供たちを、バーバラのお母さんスージー・オリオン先生が引率して、愛・アイムシュタイン研究所を訪ねました。

「【愛・アイムシュタイン研究所】だって、なんかこう変な名前だなぁ」

「トミー、だまってなさいよ」

「わ、わかったよ、バーバラ」

「お電話したマロン小学校のオリオンです」

「おぉ、ちとまってくれんかの？実験の最中でのぉ。みゃあ（まぁ）、ひゃーりなさい（はいりなさい）」

エイミーたちはオリオン先生に続いて、アイムシュタインの一番のお気に入りの研究室に入って行きました。

「は、はじめまして。噂通りすこし変人・・・。あっいや変化に富んだお野菜の帽子がお美しいですわね・・・おほほほ・・・」

「ひゃーりなさいってどこの言葉？」

「こ、こわそうな人・・・じゃなさそうね・・・」

エイミーたちは思い思いに口にしました。アイムシュタインのカーボーイハットには、それはそれはたくさんの野菜が実っていました。

「なにをしているのですか？」

オリオン先生がたずねました。

「なぁに頭の良くなる野菜を研究しちょるんじゃよ」

「あっ、ご挨拶させていただきますわ。子供たちです」

「エイミーです」

「バーバラといいます」

エイミーたちも、少しこわごわとあいさつしました。

「そうきゃぁ（そうかい）。女の人が来てくれると、普通より何倍もうれしいのう。子供たちもかわいいしのぉ」

「そうきゃぁって何？・・・あっ、ト、トミーです」

「ところで勉強して頭がよくなるだけじゃいかんぞ。ずるがしこくてはな。ワシの研究はのぉ、心の研究じゃでのぉ」

「あのぉ、心ってなんですか？」

バーバラがおそるおそるたずねました。

「心はのぉ、それは愛じゃよ」

「あ、愛・・・？」

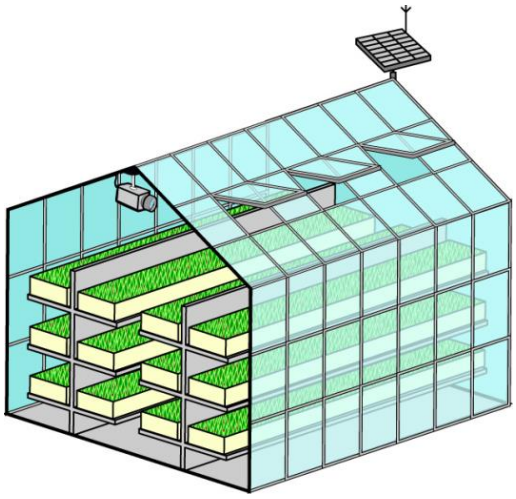
思わぬ返事に 3 人はきょとんとしました。

「あ、愛・・・ですか」

「そう、アイラブユーの愛じゃよ。アイラブユーして、結婚して、子供ができて、家族ができて、幸せになるんじゃ。野菜も芽がでて双葉になって・・・な」

そういってカーボーイハットを頭にかぶりました。

「この子たちに、まず野菜の工場を、見せてあげるとするかのぅ～～～？」



「プププ、アイラブユーの愛だって･･･」

トミーが思わずふき出しそうになりました。

「しっ、怒られるわよ。でもそれってオジンギャグ？」

「おもしろそうなおじいさんね」

エイミーたちは少し安心したようです。アイムシュタイン所長は研究室を出て、自慢の野菜工場にみんなを案内しました。

「おじいちゃん、これが工場なの？野菜、作ってるじゃん」

トミーが少し驚いていいました。

「あんた、もう、なれなれしい」

バーバラがトミーにいいました。

「ははははは、いいんじゃ、いいんじゃ、それが子供というもんじゃよ。子供はでぃやーすきだよ（大好きだよ）」

アイムシュタイン所長はごきげんです。

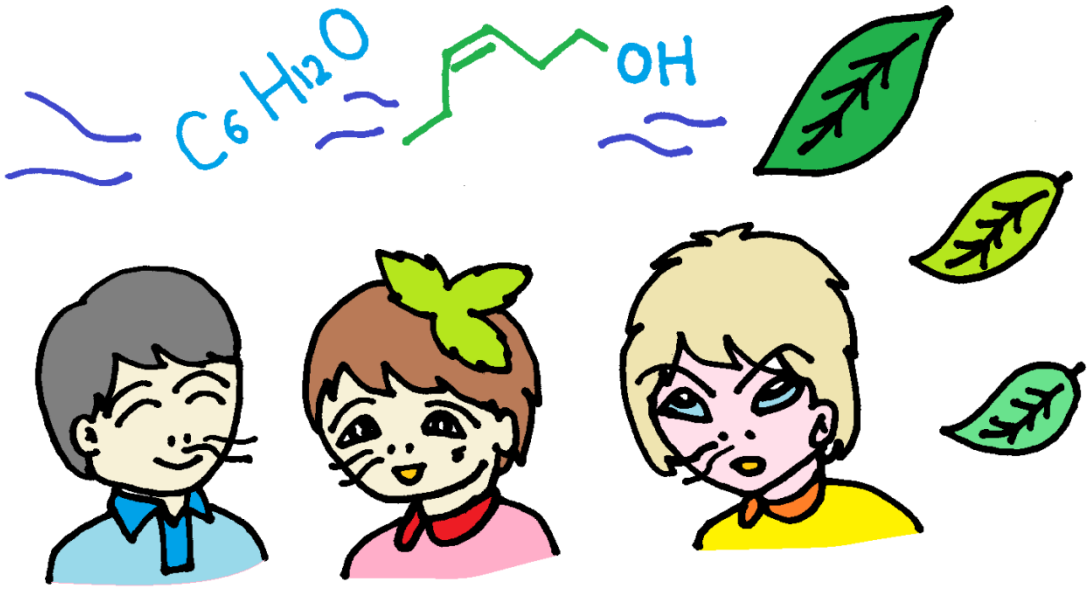
「とってもいいにおい」

エイミーもバーバラも何ともいえない香りに、心が落ち着くのを感じました。

「そうじゃよ、これが野菜の香りというものじゃな。室内じゃから香りが充満しちょるわい。外じゃ風が吹いてどこか行っちゃって、わからんからのう」

「ほんとうにいい香り・・・」

エイミーもバーバラもトミーも大きく息を吸い込みました。



「ハハハ、緑の成分じゃよ。脳が感じるとリラックスするんじゃよ」

「呼吸は肺でするんじゃないの？」

トミーがいいました。

「感じるのは脳みそじゃよ。野菜の言葉を聞くようなもんじゃな。その言葉に答えてお話するとリラックスするじゃよ」

野菜は植物工場で栽培されていました。そこには緑の野菜が何段にも積まれて、高密度に栽培されていました。

「こうして室内でお野菜を作ると虫や病気にやられにくいわよね。よく勉強しなさい」

オリオン先生がいいました。

「もうこんな日に勉強に話をしないで・・・」

バーバラが自分の母親に言いました。

「ははは、学校では教えてくれないことが勉強できるのじゃよ。ここでは半分は自然の力を借りて、半分はわしら人間の知恵を働かせてな、野菜が作られるんじゃよ」

アイムシュタインはカーボーイハットのふちを、右手で握って答えました。

「で、おじいちゃん、何で畑でなくて工場で野菜を作るの？」

トミーが質問をしました。

「そうじゃな。畑で野菜を作るのは、ワシは年で肉体労働はどえりゃあでのう。工場なら楽だし、しかも年中、野菜を作れるからのう」

「すげぇや、おじいちゃん」

トミーはすっかり感心してしまいました。工場のような農場を見学して、応接室に戻って来ました。エイミーがさっそく質問をしました。

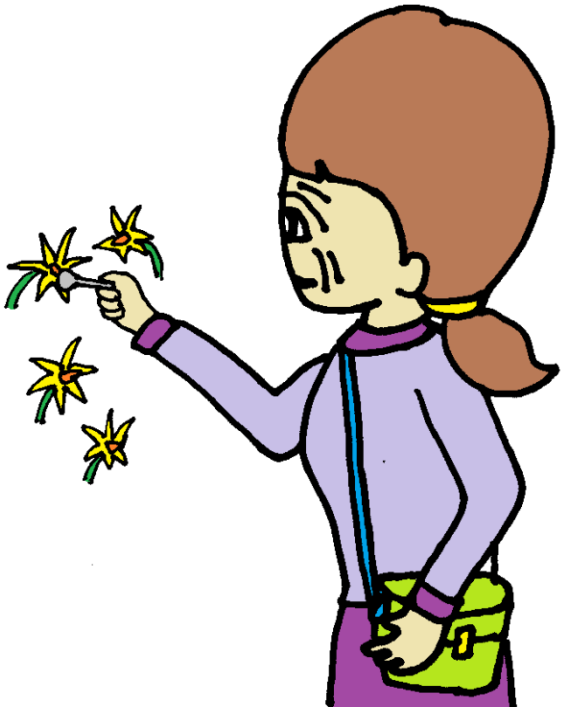
「アイムシュタイン博士、私の家はトマトを作っているの。今年はミツバチがいなくて、困っているの」

「ははははは、わしは博士じゃないが、まぁええきゃ。そうじゃなミツバチは交配といって、花と花の間で花粉をつけてまわるんじゃよ。ミツバチがいないとなると、人間の手でやらんといかんのじゃが。なかなか大変な作業じゃ。お年寄りではちと、きついかのう」

アンおばあさんの農園は、平坦な所だけではありません。段々畑になっているところや、場所が散らばっています。移動したり山に登ったり、そのきつい作業と時間がお年寄りには大変なのです。

「ミツバチがいなくなった原因は何でしょうか？」

バーバラもアイムシュタインに質問しました。



「1 カ月ほど前からちらほら報告を聞いておるがの。この地方では季節がいいので畑でも年に 3 回収穫できる。今と、夏と、秋の終わりじゃな。う～～ん、ミツバチがいないということはミツバチが生まれにゃーか、死んじゃうかなの

じゃが」

「どうして生まれないの？」

エイミーがいいました。

「なんかの病気が発生して、死んでしまうんじゃろうが・・・。・・・ただそうじゃない気がするんでのぉ」

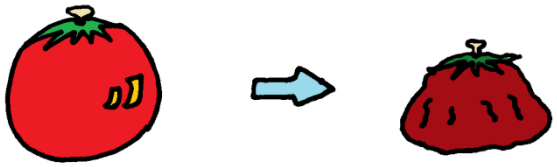
アイムシュタインは両手を組みいいました。

「といいますと？」

オリオン先生も真剣な顔で質問します。

「この間ワシの友人が来てのぉ。トマトの実がしなびてまうというんじゃよ」

「しなびてまうって、またまたどこのことば？」



「しっ、トミー」

「しなびるとは、小さくなるということですか？」

「そう、しなびたデャーコン（大根）のようになるんじゃよ。そんなトマトは見たことないからのぉ」

「ミツバチの代わりは老人にはちと大変じゃから、おまえさんたちが手伝って花粉をつけるんじゃな。がんばってちょ―よ」

アイムシュタイン所長は、そういってエイミーの頭を撫でました。

「ありがとうございます」

エイミーたちはお礼をいい、研究所を後にしました。

「トマトの実がしぼむって、どういうことなのかなぁ？」

トミーも心配そうにいいました。

「でも調べてくれるから、じきにわかるんじゃない？」

バーバラがいいました。

「でもおいら楽しかったぜ。工場みたいな農場と、いい香り。それとドライブだもんね」

トミーがうれしそうにいいました。

「あんたはいつもノー天気ね」

バーバラがいいました。

「なんだよ、その、ノーなんとかって・・・？」

「頭がいいってこと」

「そうか・・・ならいいんだ」

「やっぱノー天気ね」

「それとしなびるじゃなくて、しなびてまうだよ・・・」

2つの人海戦術

マロン村やその周辺のトマト畑では、村人が総出で花粉をつけていました。なるべく離れたトマトに花粉をつける作業が進んでいます。

「エミリー、たいへんだががんばっておくれ」

アンおばあさんがエイミーにいいました。

「バア、だいじょうぶだよ。こんなの簡単なんだから。だってミツバチにできて、私にできないなんてはずかしいもん」

といっても作業は結構大変です。畑は平地だけでなく斜面を切り開いたところや、場所が離れています。一つのところに集まっていません。全部で 0.5 ヘクタールもあるのですから、お年寄りや子供には大変な労力です。0.5 ヘクタールをひとところに集めると、1 つの辺が 70 メートルにもなる大きさです。朝早くからアンおばあさんとエイミーで、やっと少しの作業が終わったところです。

「エイミー、もういいから学校へお行き」

そういって、アンおばあさんはお弁当を渡しました。自分のお昼ごはんも外でお弁当です。

「今日は、市場へは行けないよ。花粉をつけて回らないとね・・・」

アンおばあさんは、1 日中花粉をつけてまわるつもりです。

「じゃぁ、バア、いってくるね」

お弁当を受けとり、いつもの市場へ行く道を歩いて行きました。他のトマト畑でも人々が同じように、花粉をつけて回っています。簡単に花を揺らしたり風を送ったりすればいいのですが、近くの花に受粉してしまいます。ミツバチのように違う花に花粉を届けることは、結構大変な作業です。

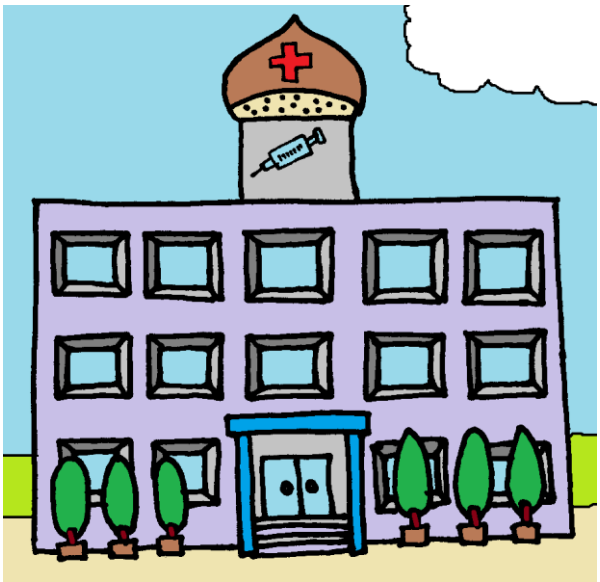
それに加え天候不順の影響で葉っぱが枯れ、葉をもぎ取る作業がもっと大変です。アンおばあさんは一生懸命トマト畑を回っては、花粉をつけ枯れた葉を取り除いて行きました。葉の付き具合も悪く果たして１ヶ月後には、大きくて赤いトマトができるのか、アンおばあさんには心配ばかりかかります。

問題はもう一つ起こっていました。こちらも人海戦術です。3 日ほど前からマロン村で病院がパニックになっていました。

「先生、急患がまた一人です。10 歳くらいの子供です」

看護婦が運ばれてくる患者にあわただしく対応しています。

「もうここは廊下までいっぱいだ。外に非常用テントを設営して対応しよう」



マロン村立病院では医師、看護婦だけでなく、事務員まで総動員となって、やってくる患者の対応に追われています。3 日ほど前のことです。2、3 人の子供がやってきたのですが、軽い風邪だと思い家に帰してしまいました。ところがその後兄弟や近所の子供たちが、次から次へと病気になりました。

「季節外れのインフルエンザなのだろうか？」

熱は出ますがインフルエンザのような高熱でもありません。咳も鼻水も出ますが単なる風邪のような症状でした。しかし全身に発疹が

できたりけだるいようすです。変わった症状として熱が出ていない子供でも、目がうつろで元気がありません。

「伝染性の何か新しい病気の疑いもあるな・・・。まだ３日じゃウィルスも発見できんしな・・・」

病院のサイモン・ウェアー院長も対応に苦慮しています。事務員も村人も総出で、病院の庭や近くの空き地にテントを張って患者を受け入れています。

UFO のうわさ

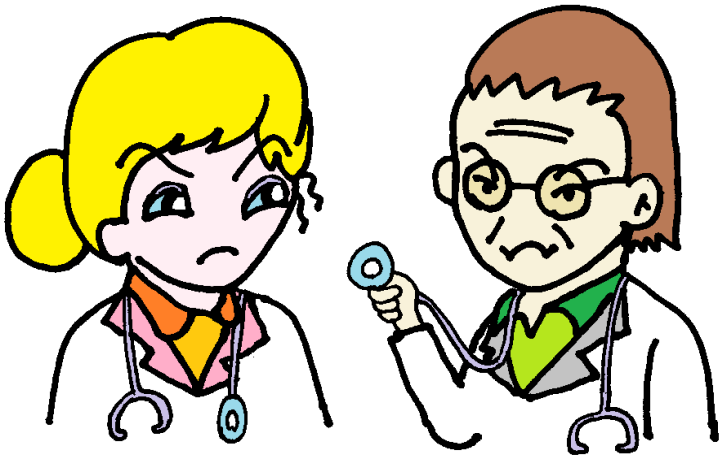
次の日、学級委員のエイミーはバーバラとトミーを連れマロン村立病院へやってきました。エイミーの学級でも５人もの生徒が休んでしまったからです。

「ひどいわねぇ。まるで戦場のよう」

映画で見た戦場の病院のような光景を思い、バーバラがいいました。

「惨状という戦場？」

「ここもオジンギャグ？」



病院のウェアー院長が見舞いに来たエイミーたちの後ろに立っていいました。

そこへリア・ウェアー小児科長が入ってきました。

「院長、ちょっとお話があります」

「おぉ、リア、どうしたのかね？」

「ひとつ、ふたつ変わった情報があります」

「変わった情報とな？」

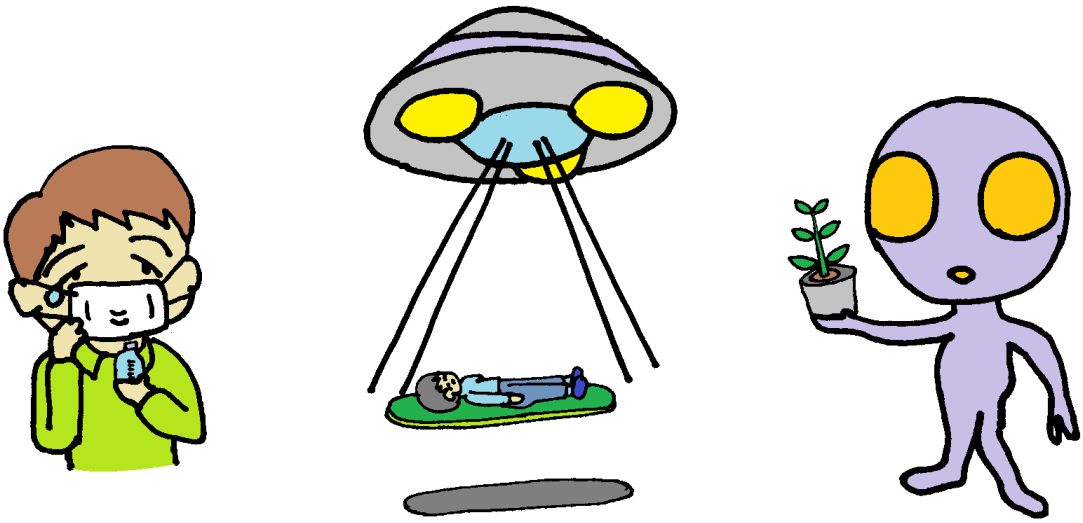
「ひとつは患者さんに、UFO のようなものを見た、という人たちがいます。光るものが空高く上の方に舞い上がったかと思うと、すごいスピードで林の方へ飛んで行ったというのです。この村だけでなく隣り村でも見たそうです」

　リアは両手を広げて、きょとんとした顔でいいました。

「光るもの？飛ぶ？」

エイミーたちは少し嫌な予感がしましたが、黙って聞いていました。

「それともうひとつあります。目の大きな宇宙人に、倒れているところを助けられたということです。そしてその UFO でここに連れてこられたというのです」



リアはまた同じように両手を広げて、首を横に倒すようなしぐさでいいました。

「目の大きな宇宙人？」

エイミーはバーバランとトミーの顔を見ながら、リアにたずねました。

「それで、その宇宙人たちはどうしたのかしら」

「丸い空中に浮く担架みたいなのに乗せられてやってきた、というのよ。どうやって来たのかは覚えていないそうよ」

【まさか・・・】

エイミーはバーバラの顔を見てつぶやきました。

「その患者さんたちに、会わせてもらえますか。聞きたいことがあるんです」

エイミーがいいました。

「それが不思議なことにその患者さんたちはもう病気が治って、帰ってしまったそうよ。私もベッドが足りないので元気になったのを見て、訳も聞かずに帰してしまったのよ」

リアはありのまま起こったことを説明しました。

「そうか、それは変な現象だな。で、他に何か変わったことは・・・？」

「そういえば、院長、宇宙人から小さな木をもらって、喜んでいたとのことですが・・・」

リアはそういって部屋を出て行きました。

【小さな木？】

エイミーはますます嫌な予感がしました。バーバラとトミーも同じように顔を下に向けて黙っています。

「きみらも調子が悪いのかい？」

ウェア院長がたずねました。

「あ、いや、大丈夫です」

3 人はあわててウェアー院長にいいました。

「そうそう、病気の生徒の見舞いに来たのだね。こっちだよ」

そういって別の病室へ 3 人を案内しました。

「この病気は原因不明だ。もう 1 週間以上たつがウィルスも検出できん。なにか未知の物質が影響していると思われるだが」

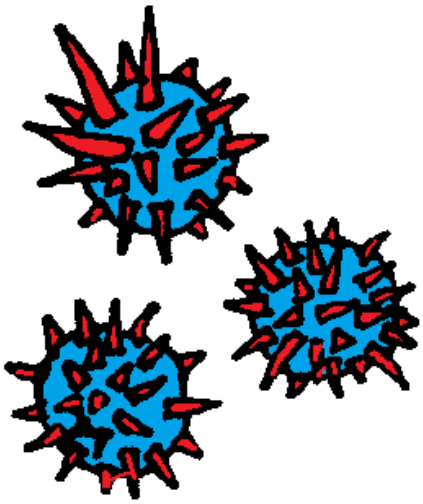
【未知の物質？トナトンの国で起こっていることと同じなのかな？】

　エイミーはふとそう思いました。

「どう、だいじょうぶ？」

　エイミーは同じ学級の生徒に声をかけました。

「元気出せよ。おいらなんかテストで 0 点とっても元気いっぱい」



「あんたはお見舞いに来ない方がいいわ」

　バーバラがトミーに言いました。

「少し説明した方がいいな」

　ウェア院長が 3 人に向かっていいました。

「き、気力がなくなる・・・？」

「み、未知のウィルス・・・？」

　3 人は思わず大きな声を出してしまいました。

「あぁ。始めは風邪のような症状なんだが、それが治っても元気がないんだよ」

　ウェアー院長がエイミーの顔を見ていいました。バーバラもトミーも心配そうに級友の様子をうかがっています。

「でもさっき元気になって帰ってしまったって・・・」

「そうだな、そうリアが言っていたな。なんか小さい木がなんとかって言っていたな・・・。こうしてはおれん。それを調べてみよう」

ウェア院長はそう言って、部屋を出て行ってしまいました。

「木って私たちのもらったあの木のことかしら？」

エイミーがバーバラに言いました。

「わたしは感が悪い方だけど、たぶんそんな気がすんだけど」

「おいらもそんな予感がするよ」

今まで黙っていたバーバラもトミーも口を開き言いました。

「おいらそれが効くんだったらレタ君に頼んでもらってくるよ」

「そうね、それはいい考えだわ。トミーもたまには頭が働くじゃない」

「バーバラ、おいらせっかく真面目に言ってるのに・・・」

トミーはバーバラに舌を出して答えました。

こころの木の威力

病院を出た 3 人は歩いて、マロン村の街の中心の噴水のところまで来ました。歩く道の中で、3 人はひとことも話すことはなかったのですが、突然トミーが叫びました。

「アレ〜〜っ！あれってレタ君たちじゃないの？」

「トミー、耳元で大きな声出さないでよ」

「バーバラ、ごめん。でもあれを見てよ」

トミーの指さす方向に、エイミーとバーバラは目を向けました。

「す、スカイブルー隊長・・・？」

エイミーもバーバラも噴水の前の人だかりの上方にスカイブルー隊長とサーヤが浮かんでいるのが見えました。3 人は急いで駆け寄って行き、大人たちをかき分けて一番前に来ました。

「あ、あなたたち～～、なにやってんのよ～～～」

エイミーは思わず大きな声で叫んでしまいました。

「しっ、静かに・・・。今、一番面白いところなんだ」

隣にいるひとりの大人が言いましたした。

「アハハハハ・・・」

大きな声でみんなが笑います。みるとトナがあの縦じまのパンツを頭にかぶり、どこかで捜してきたのか同じようなパンツをデコもかぶり、レタはそれをくれと追っかけまわしています。

「エ、エイミー、か、帰ろうよ・・・」

バーバラが言いました。トミーも大きくうなずいています。

「そ、そうね。ここはそっと帰った方がいいわね」

エイミーもそう言って後ろを振り向こうとした時、トナにつかまりました。

『エイミー、いいところに来たわ。またレタがこの帽子をくれって追いかけてくるのよ。うるさいもんだから同じのを街に捜しに来たトナ』

「なんだ、君たちの演技かい。とってもおもしろかったよ」

レタがかぶっていた麦わら帽子を脱いで反対に裏返してエイミーに渡そうとしたところ、ひとりの大人がお金を投げ入れました。するとまた別の何人かも同じようにお金を投げ入れ、麦わら帽子はお金でいっぱいになりました。

『なんだよ、また変なゴミでいっぱいになったよ。帽子はゴミ箱じゃないんだよ。だから嫌だっていうんだニ』

「お、おいらが持っていてあげるよ」

『トミー、君だけはボクの味方だね。こんなゴミは捨ててきてよ』

そういってゴミだと思っているお金のいっぱい入った麦わら帽子をトミーに渡しました。

「そ、それはそうと、どうして誰もあなたたちを疑わないのかしら」

バーバラが逃げていたトナにたずねました。

「だっておよそ私たちとは姿が違うのよ・・・」

『それはこれよ』

そう言ってトナはこころの木を出しました。

『これを持っていると持っている人にシンクロするのよ』

「シンクロって？」

エイミーがたずねました。

『それはこころの木を持っている人の心に同期するってことよ。わたしたちが変な者じゃないとわかるから、落ち着いていられるトナ』

トナはエイミーの顔を見ながら説明しました。

『でもそのことと帽子とは別のことだぜ』

レタが、トナとデコに言いました。

「レタ君、そのトナさんたちがつけているパン・・・いや帽子は、ボクが捜してきてあげるよ」

トミーはレタにいいました。エイミーもレタに言いました。

「これはトミーに任せたらいいわ」

「それとこの麦わら帽子とお金はゴミじゃないから、また良い事があるから持っててね」

そう言ってバーバラがトミーの手からそれを取り、お金を自分が持っていた袋に入れ、帽子と一緒にレタに渡しました。

「ちょ、ちょっと、バーバラ・・・」

「いいのよ・・・」

『トナ、デコ、これあげるよ。良いものなんだって』

レタはお金の入った袋を渡そうとしました。

『いやトナ』

『いらないポン』

『な、なんだよう。エイミーがいいものって言ってるじゃないか』

「また喧嘩になりそうだから、いいわ。私が預かっておくわ。きっと必要な時が来るわ」

『エイミーがどこかに捨てるといいトナ』

2 日後、エイミーたち 3 人はこころの木を持って自転車に乗り、再びアイムシュタイン所長を訪ねました。そして 10 センチメートルほどの、小さな苗木を渡しました。

「これはなんじゃいな？」

「これはこころの木といいます」

エイミーが陶器の器に入れられている、苗木を見せながらいいました。「そうそう、これと同じような木を持っている子が、実はここにいるんじゃよ」

アイムシュタイン所長は、そういいました。

「えっ？これと同じ木を・・・ですか？」

バーバラが驚いて聞き返しました。

「おーい、君たち、こっちへおいで〜〜」

アイムシュタイン所長が、大きな声で呼びかけました。すると大きな温室のどこからか、走ってやって来る見たような姿がありました。

「フ、フレンズの用心棒レモンズ姉弟！」

3 人はびっくりして叫びました。

「クラウシア君に、こわそうなレモンズ姉弟。どうしてこんなところにいるんだい？」

トミーが驚いてたずねました。

「こころの木も持ってるし・・・」

エイミーとバーバラもきょとんとしています。

「この子たちは、ここが気に入ったようで、ここで暮らしているんじゃよ」

アイムシュタイン所長がいいました。

「実はもうその木は、もうわしらが育ててるんじゃよ」

エイミーたちは驚きました。

「どうしてこうなったのかは知らないけど、ほんとうに神出鬼没ねぇ。さすがフレンズだわ」

バーバラがいいました。

「この間の頭の良くなる帽子、いや、心を落ち着かせる帽子じゃが、その後はどうだい？わしもいろいろと、昔から研究しておっての、いろいろとこの子たちに教わって、それがわかってきたんじゃよ」

『なにがかニ？』

レタがたずねました。

「今回のマロン村ではやっている病気のことじゃよ。これはウィルスでもなんでもない。心の病気じゃな」

『ボクにゃんがいろいろと研究の手伝いをしているにゃあ』

ヒューマニーワールドで得られたデーターを、クラウシアはここでアイムシュタイン所長と一緒に研究していました。

『未知の物質が病気の原因であれば、つじつまが合うにゃあ』

クラウシアがいいました。

「この病気はウィルスじゃにゃーな。これは自分との戦いじゃな。人間が本来持っている、心の力を使う事になるがね」

アイムシュタイン所長もクラウシアと同じことを考えていました。

「で、この子たちは、君たちの連れじゃな。一緒にキャーる（帰る）か？」

アイムシュタイン所長が、フレンズに向かっていいました。

【ううん！】

「なに、キャーらない（帰らない）のか？」

「どうもフレンズは、ここが気に入っているようね。しばらくここにいた方がいいかもしれないわね」

　エイミーは言いました。

「ス、スカイブルー隊長！！！」

　トミーが窓の外を指さして叫びました。スカイブルー隊長とサーヤが中を覗いて手を振っています。

「ったく～～～」

　エイミーもバーバラも何も言うことはありませんでした。

「こころの木を育てていると、わしが長年考えていたことが、実現できそうな気がする」

「それはアイムシュタイン所長の愛なのね？愛の帽子がマロン村を救うのね」

　エイミーがいいました。